



# 東九州支部報

日本山岳会東九州支部



初冬の祖母山(黒岳より)

## 《 もくじ 》

石鎚山へ	1
地図から消えた道	2
元越山と椿山	3
背振山系「金山」	
「井原山」山行記	3
椿山公園を訪ねて	4
(社)日本山岳会富山支部	
五〇周年報告	5
権七小屋谷の出会い	5
シシヤパンマ峰(8013m)	
「外」登山日記	6
五月月例山行のお知らせ	11
後記	11

## 石鎚山へ

(十一月月例山行報告)

児玉章良

今月の登山は、海外登山である。海外と  
いっても豊後水道を越えて四国に渡るだけ  
である。あいにく土曜日の出発だったので  
参加者は、佐藤先生、木本さん、林さんの  
計四名であった。

十五日午前十一時三十六分、大野の実家  
を出発。佐藤先生の家で車を乗り換え佐賀  
関へ向かう。午後二時の「国道九十四フェ  
リー」に乗る。午後三時十五分、三崎着。  
名物ジャコテンを買い、ひたすら「面河」  
へ向かう。

さらに、石鎚スカイライン(無料)に登  
り、「国民宿舎石鎚」の付近にテントを張  
る予定であったが、石鎚スカイラインが既  
に閉鎖されていた。午後六時以降は通行止  
めとなる。(十二月、三月は閉鎖)仕方な  
く、「国民宿舎面河荘」に泊まる。(午後七  
時)

汚いし、温泉ではないため入浴時間が制  
限されている。料金は食事なしで一人四二  
〇〇円。但し料金別で「岩茸」などの山の  
料理も楽しめるそうだ。

とにかく車の運転に疲れた。簡単な宴会  
をして、午後十一時〇〇分に就寝。曇り時  
々晴で暖かかった。

十六日午前六時四〇分、起床。土産を買  
って午前七時四〇分、宿舎出発。石鎚スカ  
イライン(午前七時に開く)に登り、午前  
八時一〇分、「国民宿舎石鎚」に到着。準  
備を整え、午前八時二七分、「石鎚山」へ  
向かう。午前九時五二分、鳥居のある社務  
所に到着。あいにく社務所は閉鎖されてい  
た。(夏場はここでお守りやジュース等を  
売っている。)ここから三つの鎖場を楽し  
める。午前一〇時三二分、山頂着。

ここには立派なお社があるが、三角点は  
別の山頂にある。あいにく昼から雨が降る  
という天気予報が当たって、途中から景色  
が楽しめなくなり、山頂では全くガスの中

であった。

山頂から七分ぐらゐの天狗岳  
(一九八二)まで足を伸ばし  
記念撮影を済まし、午前一一時  
二〇分、出発。

途中、昼飯を食べ、午後一時  
〇一分、宿舎着。土産を買って  
車に乗り込み、石鎚山から見  
ていた「瓶ヶ森(1896.5  
分)」へと向かう。二〇分ぐら  
いで駐車場着。午後一時四〇分  
山頂へ出発。午後二時〇七分、  
「男山」着。午後二時二二分、  
「瓶ヶ森(女山)」着。午後三  
時一〇分、駐車場着。あいにく  
「瓶ヶ森」はガスの中で何も見  
えなかった。草原の山である。

五語四時、スカイラインを降  
りてきて入り口のところにある  
「登山博物館」に立ち寄る。  
五語四時三〇分、三崎へ向  
て出発。途中土産で「青トマト  
ジャム」を買った。これがおい  
しかった。雨が降り始めた。  
午後七時三〇分、三崎着。夕飯  
を食べて午後八時三〇分のフェ  
リーに乗って、午後九時四〇分、  
佐賀関着。一七日午前〇時、大  
野町の実家着。午前三時、珍珠  
着。午前四時、就寝。午前七時、  
起床。午前七時四五分、珍珠農  
業高等学校勤務につく。

かなりハードなスケジュール  
だったが、一度は行ってみたい  
山だったので楽しかった。もう  
一週間早ければ、「面河溪谷」  
の紅葉も楽しめたようだ。もう  
一日あれば、その奥に聳える

「伊予富士(1756分)」  
「笹ヶ峰(1859.9分)」  
等にも足を延ばせば、とても良  
い山だそうである。いつかこの  
月例登山に組み込まれることを  
希望して報告とします。

同行者：木本、兎玉、  
佐藤(正)、林

### 地図から消えた道 雪深峠を探して

(二月月例山行報告)

加藤 英彦

昔から慣れ親しんで歩いてき  
た道。隠されたように人知れず  
通っていた道。そんな道が今で  
は地図の上からも消されてしま  
っていることがある。その一つ  
が「雪深峠」を越える道である。  
今回四〇年ぶりにこの峠を訪  
ねる機会に恵まれた。何年も前  
から気になっていたこの峠であ  
る。「雪深峠」というネーミン  
グがまた非常にひびきのある、  
ロマンチックな名前である。

この峠に關しての思い出をふ  
りかえると、幼い頃のことだ  
りに浮かんできると。昭和二〇年  
代の十年間、我が家は当時の飯  
田村硫黄山、今でいう九重町長  
者原登山口近くに住んでいた。  
戦後まもない頃で物資の少な  
い時、道路網や交通機関など、

今とは比べものにならないほど  
不便な時代であった。確か、昭  
和二十七年だった。大洪水に襲  
われたとき、十三曲りの道路が  
寸断された。町(大分)に出る  
道路が通れなくなったのである。  
そのため飯田村から大分へ出る  
近道としてこの千町無田を經由  
して雪深峠を越え、湯の平へと  
続くこの道を何度か越えた記憶  
がある。

淋しい山道で、まだ小学生の  
頃だ。母に手を引かれて、狐に  
遭遇しこわい思いをしながらも  
何か草状の峠が忘れられなか  
った峠道の記憶が今でもはつき  
りと脳裏に焼きついて離れない。  
そんな「雪深峠」の記憶をず  
つと持ちつづけていて、いつか  
きつと訪れてみようと思ってい  
た。そのチャンスである。

初冬の快晴のある朝この峠を  
求めて、千町無田の部落をすぎ  
たところで、送ってくれた車を  
おりた一行十名は、まだ日陰に  
は氷状の雪が残っている舗装さ  
れた林道を、バリバリと氷のわ  
れる音をたてて、少しづつ登っ  
ていく。

昨夜あれだけ楽しく飲んだア  
ルコールがじわじわと体から抜  
けていくのが感じられるほどだ。  
それかといつて特に気おっ  
てる風でもない。今日の歩きが簡  
単な峠を越えるということを知  
っているからだらう。  
やがて林道の分かれ道に出る。  
二万五千分の一の地図と昔の地

図を見くらべて、右へ登る林道  
へと進む。数日前に来た今年一  
番の寒波の時に降った雪がまだ  
数センチ残った林道を、めいめ  
いが楽しそうに登っていく。何  
かけもの足跡が残っている。  
ウサギだろうか。いやこの歩幅  
の小さいのはタヌキかもしれな  
い。足跡が交差したり、まっす  
ぐなったりとずっと続いている。  
やがて大きな分かれ道に出る。

再度地図を拡げて確認する。確  
かに二万五千分の一の地図には  
林道が出てはいるが、峠として  
の名称もつけていない。雪深峠  
は消えたことになっている。何  
しろ四〇年も前の記憶をたどり  
ながらの行動である。

大きな送電線の鉄塔もなかつ  
たし、周りの樹木も全く違つた  
大きく育つた杉林となつている。  
「確か、ふりかえると九重の山  
が見えたと記憶しているが」と  
これ又四〇年ぶりに歩くI氏も  
思い出にふけていた。

やがて、はつきりとしていた  
林道も行き止まりとなり、やや  
ブツン化した昔の道へとつき  
進むようになる。右手に見える  
一〇七五分のピークを確認しな  
がら、カヤを踏み分け、かすか  
に残る踏み跡をたどりながら雪  
道を進む。やがてそこから先は  
下りにかかるという地点で、昔  
の峠であつたと思われる地点に  
立つ。  
小さな古ぼけた作業小屋があ  
り、営林署の昔の立て札が立つ

ている。ここだ。ここに間違い  
ない。これがずっと宿題として  
気になっていた「雪深峠」であ  
る。



(雪深峠にて)

周りは生長した杉林で見晴ら  
しもきかず、あの草原状であつ  
た昔の面影は全くない。しばら  
く感傷にふけりながら全員で記  
念写真を撮る。そして長居は無  
用と峠からの下りにかかるが、  
これがまた全く昔の道をたどる  
ことが出来ずに、右への林道の  
下りをとらざるをえなくなつて  
しまつていた。  
単調な林道の道をたんたんと  
下つていき、やがて湯の平温泉  
から男池へと通ずる農免道路に  
出て、湯の平には正午前にはお

り着いた。半日行程の峠を探ねての山歩きは終わった。

四〇年前の「恋人に」に、氣になつて、記憶の底にはその人のことが忘れられずにとつていたが、訪ねていってやると会えたと思つたら、年をとつていて昔のその人ではなかつた。そんな感じの雪深峠であつたと笑つた今日の峠歩きであつた。

(九、一二、一四)

参考地図 国土地理院 二万五千分の一 「大船山」「湯平」

日地出版

登山ハ

イキング 九重飯田高原久住高原(昭和三七年版)

同行者：安東、飯田、井手、加藤、清水、田尻、継松、西、星子、

## 元越山と樺山

(二月月例山行報告)

清水りつえ

一月二五日(日)平成一〇年初めての支部月例山行にふさわしく、すばらしい良い天気です。冷たい朝です。この冬一番の冷え込みのようでした。一週間前よりたびたびの雪で、九重、阿蘇の方はかなりの雪がつもつていふとの事です。真っ白になつた久住の山の方へ変更して行

かないかなあと思ひながら、午前六時サニーを二〇名四台の車に分乗、佐伯市と米水津町との境にある元越山(582m)へ出発。

途中、野津あたりの畑等は真っ白の雪でしたが、佐伯の方に入ると、もう雪はなくなりました。

色利浦と案内板のある公園も所の、漁港の駐車場に車をおき八時〇〇分、立岩神社の階段を上がり、登山道へ入る。しばらく登ると雪、雪が積もつています。県南の山にこんなに積もるといふことは珍しいと話してました。

赤い万両の実、ヤブ椿の花が雪に散つて美しい。オモトも赤い実をつけていました。途中林道に出る。足跡もないきれいな雪が積もつています。空気が冷たくて、空は青く、この上もなく快晴です。歩く雪の音もいー動物の足跡が雪の上にはつきりつきりついていて、足のあいだにシツポをひきずつたような跡はネズミ、これはウサギ、とワイワイ、ガヤガヤ。林道を10分ほど歩いて又山の中に入る。10時10分頂上！ウアースゴイ！リアス式海岸が美しい豊後水道が、はるか向こう、四国の方までよく見えます。九重山群、祖母、傾、……。一人で登つた彦岳がすぐ前に、とにかくみいんな見えます。

(元越山頂にて)



時間もはやいので、次の山は樺山か石槌山。どちらに行こうか。帰る途中の樺山に登ることに決まりました。

頂上で全員集合写真を撮り、一等三角点にヤツホー。一〇時四〇分頂上を後に、ヤブこぎをしたりして、一二時〇〇分以下におりる。

色利浦を四台で出発したのですが、途中後続の二台がこない番匠川の信号の所で待ちました。が来ません。道を間違えたのだろうか？と、樺山の方へ行く。峠は凍つていて、下の方で車を止め、後の二台を待ちました。が、まだ来ない。私達七人で登りはじめました。舗装された凍つた道を歩き、樺山登山口の古い標柱より杉の植林地の中の林

道にはいる。

林道はブルドーザーがはいり拡張工事をしていました。運転手の人が「樺山は雪が深くて登れないよ」と注意される。未舗装の道をしばらく歩き、尾根の切れた斜面のせまい道に入る。雪は膝まであります。スパッツをつける。雪は柔らかくて、すべつて、とにかく歩きづらい。そのうち傾斜は急になり、谷へ切れ落ちた斜面もあり、あちこちに岩が出ていて足元が不安定です。短いアップダウンを繰り返す。急な登りは二本のストックでなんとか登りましたが、下りは二本のストックをもてあまし、立木をストックごとつかまえたたり、とにかく一生懸命で大変でした。三時〇五分に頂上に着く。

樺山と、やさしい名前なので、やさしい山かと思いましたが、雪の樺山は大変でした。山頂は狭いが展望は良かった。三等三角点があります。九重連山、大崩、祖母、傾連山、東面の樹の間からは、すぐ前に尺間山がわずかに見えました。

下りは皆さんについていけそうもありませんので、最後におりにことにしましたが、私の後からおりにくださった方、ありがとうございました。

下る途中、はぐれた人達が登つてくるのに会いました。車がバンクして遅くなったそうです。雪もあり、お天気も、眺めも

最高！ほんとうにすばらしい山行きでした。帰つてから、樺山でしんけんにとストックを使ったので、二、三日腕が痛かった。(一〇、一一、二五)

同行者：佐藤、安藤夫妻、木本、木本夫妻、木本、飯田、清水、土居、脇屋、藤井、松村、小竹、斉藤、小橋、甲原、中尾、甲斐、岸本、西、

## 背振山系「金山」

「井原山」山行記

(二月月例山行報告)

渡部 昭三

二月の月例山行は福岡県と佐賀県の県境に延びる背振山系の「金山(967m)」と「井原山(820m)」である。

私にとつて県外の山行は初めての山が多く、いつも楽しみで万障繰り合わせて参加するようにしている。

いつもは家族に起こされないとききなのが、登山のときだけは不思議と、時計が鳴る前に目が覚める。今朝も三時には目が覚め、まず、窓を開けて天候を見る。霧雨が降っているが、天気予報では「朝方には回復する」とのことであつたので迷わず支度する。

集合時間の四時には、全員集

合しており、四時前に3台の車に分乗し、サニースポーツ前を出発する。大分自動車道を通り、玖珠インターで児玉先生と合流、これで今回の参加者は九名全員揃う。佐賀大和インターで下り、国道二六三号線を北に進み、登山口の三瀬峠に6時30分過ぎに着く。

三瀬峠もまだ雨の中で、薄暗く、晴れる気配はない。各人思い思いの軽い朝食をとり、雨具を着けて小雨の中を七時〇〇分に出発する。

登山口は少し急坂であるが、すぐに尾根に出る。登山道は起伏に富んだ稜線に沿って延びており、九州自然歩道となっている。霧で視界が悪い中、アップダウンを繰り返して、徐々に高度を上げていき、八時五〇分、金山山頂に到着。

雨は上がってきたが、白い霧で見晴らしは全くなし、恒例の「……金山登山万歳」と「……ヤッホー」で氣勢を上げ、写真撮影をして、早々に引き返す。

一〇時三十五分三瀬峠着。雨も上がり視界も良くなった。雨具を脱ぎ、今度は反対側、西方向の「井原山」を目指して出発。

玄海原発からの高圧線の下を抜け、ヒノキ林を過ぎると尾根に出て、同じような起伏に富んだ稜線が続く。霧も晴れ、右眼下に福岡市の市街地が見えてき

た。ハングライダーで飛んでいけそうに近くに見える。

急坂はないが、距離が長い。バテそうになった頃ようやく山頂に着く。(一二時五五分)山頂はミヤコザサが繁茂し、かなり広い。

山頂からの展望はすばらしい。北の方向には福岡市街、博多湾、その中に元寇の島「能古島」その向こうに海の中道が延び、先端に金印の島「志賀島」が見え、南はやや霞んでいたが、有明海とその右には「雲仙普賢岳」がかすかに望まれる。



(井原山頂にて)

遅い昼食をとり、もう一度三六〇度の眺望を満喫し、同じ道を下山する。(一三時三五分)前方に午前中に登った金山、その向こうに背振山がレーダード

ームを抱いて聳えている。午後三時〇〇分登山口に到着。一路「安全運転」で大分へ。

私のとつて山岳会東九州支部の山行は、いつも新鮮な発見と体験があり、良い仲間と会えて語らえる楽しい山行です。今回は、霧の中を良く歩いた、きつかった、でも楽しかった……。(二〇、二一、一五)

同行者：斉藤、渡部、牧野、清水、西、飯田、田尻、児玉、岸本

### 椿山公園を訪ねて

(三月月例山行報告)  
加藤 英彦

「前日本山岳会東九州支部長野口秋人先生のごよなく愛した椿を訪ねて」

野口先生は昭和三十九年より二十四年間、東九州支部長として会の発展にご尽力いただき、あの親しみある態度で我々支部員に接し、ご指導いただいた功績大なる支部長であった。

平成元年十月五日、七十九歳にて惜しくも他界された。先生は椿について造詣が深く、多くの椿を育てていた。死後、それは宮崎市にある椿山公園に移

されたと聞いてはいたが、なかなかそれらを見る機会に恵まれなかった。

今回、宮崎支部の方で「九州四支部の集い」が企画され、双石山に登って椿山公園を訪ねるという計画が、またとないチャンスだと思い、大いに期待して参加した。そしてそれはまったく期待どおりのすばらしい企画であった。

五〇九の双石山については軽くみていたが、どうして、どうして立派な山であり、照葉樹林と岩峰とが見事にマッチした味のある山であった。(宮崎百山の一つ)そして、下山後その椿山公園を訪ねたのである。

入口の人工池の畔で、参加者全員が芝生の上でビールを飲み、昼食をとつての和気あいあいのあと、椿山公園の中を案内された。

目ざすは野口コーナーである。山全体が椿の木でおおわれた公園であり、行けども行けども椿の木ばかりである。ちようど見ごろな花がいっぱいである。

野口コーナーの入口には立派な石碑があった。表に「野口秋人記念園」とあり、裏に「別府市野口中町野口史郎氏より御尊父故野口秋人氏御遺愛の椿、約千三百本の寄贈を受ける」平成二年三月宮崎市長長友貞蔵と彫つてある。

案内の宮崎支部長大谷氏の説明だと、実際は二千五百本くら

いあったそうで、この椿山公園の中でも、この野口コーナーにすばらしい椿が一番多いということだ。

なるほど、いろんな品種があり、大きいものから、色も白やピンク系もあり、今が盛りと咲いている。

なぜ別府市の野口家にあつた椿が、遠く離れた宮崎市の山の中にあるのかといった疑問が率直に浮かぶが、そんな議論はその辺の事情を聞いてみないとわからない。

園の入口近くの五層式の木製の展望塔に登ってみると、三六〇度の緑の大パノラマが展開された。好天に恵まれ、今登つた双石山もすぐそばに見え、遠く太平洋の海も望まれた。宮崎市制六〇周年の記念事業の一つとして整備され、平成二年五月に開園し、一〇万本(世界一の椿園)を目指して現在も整備が進められているとのことである。その中でも、野口記念園はひとさわすばらしい一角を占めている。

我々、東九州支部に在籍し、野口先生の訓導を受けたものは、一度はこの野口記念園を訪れて、支部長を追悼し、その業績を偲ぶ機会を持つべきである。それが亡き野口支部長に対してのせめてもの恩返しになることと思

う。年に一度、椿の咲く季節に、支部としてこの行事を設定した

らどうだろうか提案したい。大分と宮崎の間の距離はかなり遠い位置となつてしまつたが、今回この椿山公園、野口記念園を訪れてあらためてその思いを強くした次第である。

(一〇・三、一四)

同行者：加藤、阿南、佐藤、児玉、小竹、岸本、安東、平峯、佐藤(正)、西

## (社) 日本山岳会富山支部五〇周年報告

西 孝子

星空に晴天の願いが通じ大分駅へ。シーガイヤも机があり、プライベートルームのようで、机上ランプがあり私だけ。車掌に小倉駅で下車連絡に来てほしいとお願ひする。

小倉駅は改築中で、新幹線出札口が遠い。待ち時間に羽毛服を出す。寒い。「ひかり」も小さい駅にちよくちよく止まる。朝食に幕の内とお茶。新大阪より全席指定特急サンダーバードの人となる。

日本海も波静か。やがて右手に雪をかぶつた山をたつぷりと眺めると富山である。

駅前には広く、電車と並んだ、大通りを渡り、送つていただいた地図を見ては、ぼやぼやきよるきよる歩く。迷わず富山電気

ビルへ。ここは空襲で残つたと聞く。

五階中ホールで記念講演。講師は富山大学山川邦夫助教授。「日本の南極観測」と題し、第二五次越冬隊一九八三年七月〜八五年三月、第七次平成七年一月〜九年三月(副隊長)。内陸部の氷床ドームの深層掘削を行い、深さ二、五〇〇メートルの水を取り出し、過去十万年〜二十万年の気象変動や大気の状態など、地球環境の調査スライド説明。

中村純二前副会長の頃に比べ、すべて合理的、食事も極地と思えないほど多種多様である。生活も髪を染め、型をかえ、時には女装して笑わせ、日光浴もまあと驚く程の姿。

毎日の観測の息苦しさ、やりきれなさ発散させる場面もあり、大笑いしながら「南極へ行きたい」欲望をおおられながら聞く。記念式典は、前会長藤平正夫氏ほか四名に感謝状贈呈。剣、立山を背にした地だ。一人一人は世界という舞台で活動したベテランぞろい。記念誌にも昭和四十五年ヒラリー夫妻を囲んでの写真あり。

大ホールで、まだ太陽が顔をだしているが、酒盛りとともに誰かがマイクで五十年を振り返り、歌い、語りの時を忘れた数時間であった。

私は昭和三十三年の第一三回富山国体に参加し、その時のリ

ーダーにお礼をと思ひ訪ねましたが、c班リーダーは天国ですとわざわざ知らせに、席まで酒をくみかわしに来ていただいた。再会を喜ぶ人々(東九州へおいでた福田氏も)。全国で女子三名しかいなかった、四十年前の国体のことを想ひ、二度と訪れることはないだろうと車中の人となる。

(一〇・三、二二)

黒の袋(NTTとあり)

参加者へ

- 一、創立五十周年記念誌「山岳」一五九頁
- 二、名刺入れ「八尾の手渡し和紙」
- 三、携帯灰皿
- 四、餅のおし寿司
- 五、費用  
▽会費一万円  
▽ワシントンホテル 素泊六九六四円  
▽交通費 大分→富山すべて特急指定席四八、二六〇円

### 権七小屋谷の

### 出会

飯田 勝之

スズ竹のヤブをこいで進んでいくときなりポツカリと広いところへ出た。その時私はヤブこぎの重労働から一瞬開放され、

ホツとすると同時にそれ以上の驚愕におそわれた。目の前に何と、いきなり人の姿が見えたのだ。

一体、こういう深山のヤブをかきわけて行くところに、人影など有ろうはずがないのである。そう思い込んでいたから、いきなり目にする人の姿は、一瞬、ものけかなんぞに遭遇したかのような気持ちにさせられるものである。

目の前に立つ赤いチェックのシャツとポツカーニツカーは、まぎれもなく山歩きスタイルの男性の姿だ。一瞬、ギョツとした私にこの男性、いかにも人なつっこい顔で笑いかけてくる。「こんにちは。」一瞬の驚きの後、その驚きを隠すように私の方から声をかけた。

「あの、この道は大崩に登る道で良いんでしょうか。」  
「大崩には登れないことはないけど、どういうルートで行くつもりですか。」  
「モチダ谷を登っていたらここにきたんですが。」不可解そうに言う。

祝子川の登山口から吐野を経た、餅田谷を大崩山頂に向かつていたのだが、ここまで来たら道が分からなくなり途方に迷っていたという。だから、ヤブをかきわける音を聴き、何が現れるのかとおびえていて、やがてそれが人間であるのが判って安心し、喜んでいったという。私は

驚いたのだが、実は相手から歓迎されていたとは。

ここは大崩山中腹、祝子川源流の、餅田谷の中ほどから中瀬松谷に通じる古い猟師道。猛烈なスズ竹のヤブの中にポツカリ開けた小さな沢状の河原である。大崩山から鹿納山、五葉岳へと縦走する場合、現在は稜線ルートが開かれて楽に縦走ができるようになってきているが、かつては、一旦餅田谷を七日廻りの岩のあたりまで下り、このパイパスルートを通って中瀬松谷に出て、さらにその谷を権七小屋谷との出会いまで下り、今度は権七小屋谷を登りつめて稜線に出て、鹿納、五葉へとたどっていたのである。

かねてから私は、昔歩いたこのパイパスルートを久しぶりに歩いて見たいと思つていたが、この日は祝子川の三里河原から餅田谷へ入り、岩屋のあるあたりからこのルートに踏み込んだいたのである。

今では通る人もいないのか、すっかり荒れてしまつているこのルートを一人ヤブをこいでいた時のことである。

くだんの男性。年のころは五十歳前後。「大崩山はもう三度目で、前回はグループで和久塚コースを登り小積尾根を下つたんですけれど、今日は一人でモチダ谷を登り和久塚を下るつもりです。」という。

「四、五年前から健康のため、

シシヤ・パンマ峰  
(8033)チメンツ山 登山日記

1907-7-8  
星子貞夫

A Golden Opportunity 高度7700m. ピナクルの基部である。隊員四名とシェルパ四名が一塊になって休憩する。

風は相変わらず東の方から吹いている。その風に吹かれて雪が舞っている。気温は高く雪庇の陰に座って直接風にあたらない。薄日も射している。

チェリン・ドルチエが『あと500で頂上だ。』と英語でいった。『本当か？信じられない』と喜びの返事をする。トップがルート作業をする間ピナクルの岩をピッケルで剥がし、Sにわたす。頂上往復にそなえて酸素ボンベを新品に取り替え、今まで使っていたボンベを帰りの為にピナクルの基部にデポする。

ピナクルを左に回り込み雪稜から雪面に続き最後の稜線に向かってルートが伸びていく。毎分二リットルの酸素はすごい威力である。C1-C2間の第二スロープの登りの苦しさに比べると嘘のようである。

頂上まであと200mを残すばかりだ。頂上と手前の岩稜がよくみえる。ルートは左にトラバースするか、岩稜のコルに向かっ

に自信もついで、一人でせつせと山に出かけるようになるタイプがある。

両者に共通するものは、登山道は全て整備され、標識や目印などがついているものと思いついていふしがあるということである。特に危険なのは、ピニールテープなどの目印は正規なものであるいは権威ある案内標識の一つであると思つていふことである。

アウトドアブームの中で登山道もずいぶん観光地化され、最近あちこちで見かける、擬木で造られた階段などのように、観光行政の一環で工事されたところが多くなると、登山道はそのように行政など公共機関で安全に保つてくれているものであり、道が荒れていたり、不案内であったりすると、手入れの悪さを問題にしたりする。

かつて数年前、鶴見岳北尾根で道に迷つて遭難騒ぎを起こした高齢者の二人連れが、道が不明確で判りにくいのはけしからんと、遭難の責任を荒れた道や標識のせいにしていた。(鶴見北尾根はもともとそういう人の入り込める所ではないのだ)

整備されている山道は、地元の人たちのボランティアの努力のおかげである場合が多い。

広く柴を刈り払われた道を歩けるのは有り難いが、それが山

山登りをはじめ、最初は人について登っていたけど、この頃は一人の方が多いですね。始めは一人では不安も有ったけど、この頃は大分自信もついできましたから一人の方が気楽でいいです。

最近多く見られるようになって中高年ハイカーのタイプである。餅田谷の入り口を見落として中瀬松谷に入り込み、さらにその谷の途中から支谷に迷い込んだらしい。地図を取り出して現在地を示しながらそのことを説明したが、当人は餅田谷の別れも中瀬松谷から横に踏み込んだのも気付かなかつたという。

一緒に中瀬松谷まで下り、そこから丁寧に目印のテープなどを見落とさないように忠実に谷をつめていけばやがて稜線に出るので、稜線に出れば道ははつきりしており、左に登つていけば頂上は近いこと。などをのこを教えてその男性と別れ、私はその谷を下り、鹿納山を指して権七小屋谷を登つた。

体力造りを兼ねた中高年齢者の登山が一つのブームになっているが、中高年になって山歩きを始めた人達の中には二種類あつて、もつぱら団体やグループ登山のみに限り、自分では山行計画はおろか地図やコンパスを見ろうとすらしないで、人のあとばかりついていくタイプと、山登りの面白さを知り、にわか

道として当たり前だという考えは危険であり、また、山歩きの面白さを阻害するものである。もともと登山道は、昔からの猟師道であつたり、山仕事をすする里人たちの仕事道であつたり、また、新しいピークとルートを目指して小屋の先達たちが切り開いた道であつたり、時には獣道であつたりする。

道もはつきりせず、標識すら無い山の中を、地図と磁石と視界と経験と感とでひたすら目標のピークを目指すことも、山歩きの大きな楽しさ、面白さであると同時に、また危険も伴うものである。

そんなことを考えながら、権七小屋谷をつめていくと、なんと稜線近くの急斜面に木杭を打つた階段が造られている。この大崩山付近は宮崎国体でかなり整備された所が多いが、ここもその時の産物であろう。

登り立つ鹿納坊主の岩峰の上は、人影一つない静寂の中。谷筋はまだ葉も色づきかけたばかりであつたが、山頂から見渡す祝子川源流の原生林はもうすっかり紅葉の彩り、錦の絨毯である。最高の天気のもと、最高の景色を一人楽しんで後、遠くにそびえる大崩の山頂を眺めつつ

あつた。頂上は無事にたどりついた。ただろるか、などと考えながら山頂を後にした。

(九、一〇、一九)

て直登するかしかなない。トラバースは勿論雪崩を誘発し危険である。

時に八月一八日一四時『もうこれ以上は無理だ。疲労も激しく、雪崩の危険もある。』シェルパが突然そう言つて立ち止まつた。胸までのラッセルである。六時四〇分にテントを出発してルート作業をしながら三人交替で我々をリードしてくれたシェルパ達は無酸素の8000mである。前日のトレースもフィクスロープも風のため埋まつている。全くの新雪の斜面を六時間以上もラッセルの連続である。無理もないとは思いつながらも残念でたまらない。

三日前二名のシェルパが体調を崩してC1に下つた。もし彼等がいてくれたらと残念でたまらない。でもC2でも頂上に肉薄しなかつた。例え頂上直下C2でも頂上に立てなければ心が残る。

此処まで登れただけで満足だ、と思う人もいるだろう。しかし体力、気力共充分である。ライトも食料も夜を意識して準備してある。我々の気持を察してか、シェルパが更にC3にラッセルして進んだが結局協議の結果、下山としまつた。公式到達高度は7800mである。記念撮影をトレースの消えた復路を断腸の思いで再度ラッセルしながらC3に帰着したのは17:00時であつた。シシヤパンマ8033mのあつけない幕切れである。もし出来るものなら時

をあの瞬間に戻してもう一度やりつづけたい。

### No Challenge No Life

それは一通の手紙から始まった。'98-'07.08にシジャパンマに登ろうと言う安村氏からの誘いである。安村氏は'98-'02月にエクワドルのチンボラツソで初めて知り合いとなった東京在住のクライミングインストラクターである。

私の登山人生に8000峰は遠い話だけの存在だった。書物や地図や、知識だけの存在だった。それが5カ月前のその手紙で現実のものになった。何も考えずほとんど衝動的に参加を決めた。18年前のアイコンカグワの失敗、ワスカランの敗北それら全ての総決算として高所登山をABCから見直すことにした。

体力については、今日では中高年の人々がシエルパの助けを借りてヒマラヤに登れる時代である。基礎体力がしっかりしていれば良しと考えた。タクティクスは隊に従う事にすれば後は、高所順応と体力維持の方法だけである。

従来は高所登山のポイントとして最大酸素摂取量を目安にして体力や登れる高度を考えていたが、最近のレポートでは、動脈血酸素飽和度を目安にした順応のプロセスが報告されている。(山本正嘉)

又体力は食料と関係があるの

は当たり前前の事である。ところが過去の私の山行ではいつも空腹との戦いである。これには訳がある。老若男女混成の公募隊では食料が画一的になり、自分に合ったものが無いため食欲不振になったりするのである。

これら二つの問題を解決するための計画をたてた。

第一に高度順応の問題である。8000峰に登る場合、まず4000mと6000mに障害の壁があるといわれている。そこで先ず4000mに近い富士山で順応トレーニングをし、さらにネパールで4000m、5000mのトレッキングの後に6000mのベースキャンプに入るのである。

第二に食料の問題である。隊として全期間の食料は用意してあるが、アタクク時の食料については徹底的に個人食に徹した。D.C.C.Cの滞在日数に応じてレーションを作った。これはすべて個人負担である。次に医薬品についても考えた。隊でも用意はされているが、それは何らかのアクシデントに対してである。体力維持と順応促進の二点にしぼって自外用を揃えた。

体力維持については鉄分をはじめ総合ビタミン剤であるが、高山病予防に対してはダイアモックスを用意した。(Peter.H.Hoeberich著 栗山喬之訳 高山病)これは利尿剤としては穏やかで、血液を少し酸性にし、その結果呼吸を増大させる。高所で睡眠中の呼吸刺激剤であることが明らかで非常に効果があり、かつてワスカランで経験した苦しみは全く感じることなく7500mの第三キャンプでも良く眠ることができた。

六月二十八日 富士山吉田口の佐藤小屋のテント場にテントを張った。『大分山の会』の人達のサポートに感謝している。翌日、三〇日と二回山頂を往復し登頂し、山頂に一泊して下山した。二回目に下る時八合目で、半パン、ランニング姿の中年のアメリカ人が小走りで登って来るのに出あった。富士マラソンのトレレーニングである。挨拶して彼の健闘を折り、私もこの年令でヒマラヤに登ると言うのと、彼は『No Challenge No Life』と言った。ネパールへの出発日は二〇日であったので、富士山の疲れは完全に癒すことができた。

七月二〇日 関西空港でロイヤルネパールの飛行機に足を乗せた途端、そこはもうネパールである。恰幅のいい褐色の肌をしたスチュワデスが動く度に腹の見える様な衣服(サリー)を着て、両手を合わせてナマステと出迎える挨拶である。目のやりばを考えなければならぬ。上海より約一時間もすると天候はガスとなる。茶色の揚子江を眼下にしなが、やがて緑のうねうねした横断山脈を越える。と、洪水で溢れた河川や水没した橋などの風景が眼下に現れる。雨季の氾濫である。あれはプラマプトラかガンジスカ。

夕暮れ迫るカトマンズの盆地は雨上がりで輝いている。木々の緑と人家の灯火と赤茶けた大地の色のコントラストが鮮やかである。かつて訪れたどの空港にもない自然の安らぎを感じさせる。それは雨上がりと夕日と赤土のせいだろうか。まわりに高い建物が見当たらないせいだろうか。1300mと言う高さで冷たい空気の肌触りと空気の透明さのせいだろうか。空港で4000mを1912ルギーに替える。

空港に出迎えるエージェントのマイクロボスでホテルにむかう。夜のカトマンズは暗い。ホテルに着くころ雨が降りだした。玄関は真つ暗である。ローソクの明かりの出迎である。今は雨季である。停電は珍しくない。すぐ点灯するのが不思議である。七月二一日 高度順応のためゴザインクンドにトレッキングし5000mの無名峰に登ることになる。朝から雨である。リスリバザールまでの道は山の斜面を等高線に従って忠実に辿るルートである。道から下の斜面は傾斜が緩やかになる麓まで一面の水田である。五、六枚ほどの広さの水田が魚の鱗のように斜面おすき間なく敷き詰めている。本の学校の社会課の教科書に千枚田なるものが載っているが、に比べると箱庭のようなものである。時にホテルを出てトリスリバザールを経て一六時にダウンチェに着くまで九時間も未舗装の道がた道に揺られると脳味噌の配置が狂って、半規管に異常を来たしたのか、が踊るようで元に戻るかと心配であった。七月二二日 ドウンチェからトリスリコーラーを横断して5200mのシンゴンパまでの森林の道は雨季のこの時期ヒルの群棲地である。草の葉の先端に体を乗り出して揺れている。知らずに触ると、素早く乗り移って行く。シンゴンパのロッジでズボンを脱いでみると、脛のところまで二匹のヒルが肌に食い込んだまま死んでいた。服のなかに潜りこむのには成功したが、帰える道が分からなくなつたらしい。七月二四日 ヒンズー教徒の聖地ゴザインクンドの湖のほとりを通ってスルジアクンドの峠に行き右側の無名峰(5000m)に登りシンゴンパまで一気に下る。この湖はトリスリ・コーラーの源流である。時々襲ってくる驟雨とガスで見え隠れする青藍色の湖面は5000mの高地の寒さも加わって神秘的である。空から舞下りた星たちが藍色や白色の花々になり霧に濡れて輝いている。七月二六日 カトマンズを發ち中尼道路を北上しコダリを経て中国の樺木(ザンム)にわたりニエラムに行く日である。七時に日本側八名、シエルバ九名、と隊貨のすべてをマイクロボス

とトラックに積みホテルを後にする。ホテルをでて約一時間も行くかと渋滞が始まり、やがて全く車が進まなくなった。歩いて様子を見に行くところまで先で警官が道路を封鎖している。聞くところによると、数日前この先の部落で交通死亡事故があり、役所の対応が不満で住民が道路を封鎖して抗議している、とのことである。開通の見通しが立たないので道路脇の食堂にたむろして時間をつぶすことにする。日暮れ近くになってサーダの発案で、夜間に乗じて封鎖を突破することにする。夜は見張りもいないのでシエルバ全員で道路の丸太をいっせいに動かして、そのすきに一気に通ると言う方法である。夜の時真つ暗な野道を車は突っ走る。活劇を期待していたが、その夜に話がついたらしく、何事もなく進んだ。この夜は泊まる場所もないので車中泊となる。外は激しい雨が降っていた。

七月二七日 夜激しく降っていた雨も朝は晴れている。谷から道路に流れこむ水で至るところ道路が崩壊している。その度に皆で石を転がしては補修し、人は徒歩で通過する。コダリのでまえのスン・コシ川の支流はもと立派な橋が懸かっていたのだから。コンクリートの橋桁が川の真ん中にのこっている。今はその下流の川底を車も人も通っている。昨夜来

の雨で濁流が渦巻いて今日は通れない。このような事はこの国の人々にとつては日常茶飯事なのである。川の兩岸には渡しの人夫達が背負紐を一本持つてたむろしている。中には子供もいる。空のトラックも数台ある。サーダが交渉し話がまとまると人夫が寄ってきて荷物はたちまち対岸の空トラックに移ってしまう。この間シエルバ達は荷物の受け渡しと抜け荷の監視にあたる。二時間でこの作業が終わる。後は何事も無く二時に国境の橋に着く。スン・コシ川の国境の橋はゴルジュの上に懸かっている。川底まで700位で立派なコンクリート橋である。これを中尼友誼橋と言う。ここでチベットのトラックに隊貨を積み替え、人もチベットのランドクルーザーに乗り替え、ザンムーの検疫局でパスポートのチェックを受けていよいよチベット入りである。ザンムーを過ぎると道はスン・コシ川の左岸にかわる。ヒマラヤ山脈の主稜を過ぎチベット高原盆地にかかる位置にニエラムはある。町の高度は5000mである。町の中央を中尼道路が走っている。その道を歩けば二〇分で町はずれにでてしまふ。ジュガルヒマールのニエナムプー氷河から流れた川がスン・コシ川と合流する位置である。岡を駆けあげエーデルヴァイスが群れになって咲き乱れている。人のこぶしほどのアザミの

花の群を道端でみつけた。チベット人の民家に行きスジャヤ(バター茶)を御馳走になる。七月二九日 昨日の休養で身もかるい。対岸の5000mの無名峰に順応ハイキングに行く。山は高山植物の花盛りである。ブルーポピー、アザミ、ジャコウ草、紫のトリカブト、キンバイ、トラの尾、キリン草、シオガマ、春リンドウ、柳ラン、ツツジ、スノウフラワー、黄色いダイモンジ草等々。稜線付近を野生のヤギが五、六頭ゆつくりと歩いている。雷鳥が六羽見える。鳴きウサギの声は聞こえるが姿はみえない。六時間で頂上に着く。一時間に500mの速度であり、頭痛もなく体調も良い。此処より西方にドルジェ・ラクパ、レンポ・ガシ等ジュガルヒマールの頭が見える。シシャパンマの南のニエナムプー氷河の下部もみえる。夕方より雨となり夜半には上がる。日中は晴れていて上空には雲がない。5000mの山に登って西を見れば、ヒマラヤの高峰を越えて雲が流れてくる。それがチベット高原で消えて行く。此処のスノーランド食堂の食事は中華料理で、泊まっているホテルの一族の経営で抜群に美味しい。ビールを飲んで娯楽で最後の食事をする。七月三〇日 天気は晴、無風。一〇時に出発し、一路シシャパンマにむかう。ラサに向かう

てチベット高原をいくこの一本の中尼道路はニエラムを過ぎるあたりから未舗装ではあるがよく整備されていて、車は時速30km以上で白い砂塵を巻き上げ、なだらかな丘の起伏を左右に見ながら走る。地平線の彼方まで道路以外に人のわざのなせるものは何もない。身が昇天していくような安らかな解放感に浸る。高度5000mのTang La(峠)を過ぎてニエラムから約50kmほどの地点で車は左の路肩を崩して高原に入り、何本もの轍が思い思いに続くサバイバルロードを西へ向かう。一四時にシシャパンマBCに着く。5000mのこのBCにヤクの角を飾ったモニュメントが建っている。ヤポカンチヤロ氷河から流れてくるブンジー川の辺りは青い草がやわらかく、近くの丘の上にはブルーポピーの群生がある。モラメンチン、シシャパンマ、リスム、ポーロンリ、ガンペンチンと白雪の峰々が一望にできる。後ろには遠く塩水湖の湖面が鏡のように光っている。風もなく、夏の陽光が燦々と降り注ぐのどかな高原である。時計をシエルバの習慣に従ってネパール標準時間にあわせる。これでやっと北京時間から解放されて生活時間と合う。一九時四〇分、西の彼方に太陽が沈み一番星があらわれる。米飯、カレー、ピーマンの油炒め、チリスープ、マンゴーの缶詰、ココア、ミルクと食欲旺盛である。就寝前にラシックスを一錠のむ。トレッキング中も初めての高度に宿泊する夜毎にラシックスを一錠のんだ。更に水を毎日二リットル飲んで小便をよく出し、動作はゆつくりとし、努めて複式呼吸をした。毎夕食時個人食の餅を二ヶ黄な粉餅にして食べてきた。七月三一日 明け方激しい下痢に襲われる。昨夜の食べ過ぎが祟ったのかも知れない。下痢止めをのんでやっとおさまる。今日もシシャパンマ、リスム、ポーロンリが美しい。一〇時頃よりカウベルの音とともに何処からともなくヤクが現れる。長髪(のヤク工(ヤク使い))がテントのまわりをうろつき、シエルバから叱られてはいる。ヤクは総数三二頭。この時期は草が充分あるのでヤク自身の餌を運ぶ必要がなく、すべてのヤクが隊貨を運べるので効率が良い。明日からの行動に備えて食料、テント等の整理をする。八月一日 テントのまわりの丘でそれぞれに一夜を明かしたヤクたちは一ヶ所に集められ荷積みが始まる。ヤクは気が荒く、和牛のように鼻ぐりをとおしていないので扱いが難しい。二時間かかって九時二〇分にやっとならぶ。ブンジー川のヤク達の徒渉地点はヤクの腹が水につく位の深さである。水の中に荷物を振り



落とす暴れ者もいる。BからCの  
までは一日では行けない距離で  
ある。先行するヤクの群れに付  
いて遅れながら自分のペースで  
中間のDまで八時間かかってた  
どり着く。草もまばらな碎石の  
高原で何処を歩いてよく川が  
指導である。途中突然空が曇り  
霧が降り出した。

八月二日 晴、無風。三時間  
かかってB(C560m)につく。氷  
河によって作られた碎石盆地で  
以前に入山した各隊のゴミが山  
積みになっている。ここはヤボ  
カンチャロ氷河の下流地点で正  
面にシヤパンマの北稜と北壁  
が、左にモラメンチンが頭だけ  
だしている。もうすでに隊員達  
の個人テントの設営も完了して  
いる。すべてシェルパ達が先行  
してすませるのである。A(C)に入  
る前B(C)を見下ろす500m位高い丘  
で二〇分ほど横になって休んだ  
のでキャンプに着いたとき体の  
温かみを感じた。

八月三日 五時四五分、心地  
良い目覚めである。太陽の光線  
が水平にシヤパンマを照らし  
山肌が黄金色に輝いている。ハ  
ツと息をのむ光景である。昨夜  
は気温も下がったのだから、テ  
ントに白く霜が降りている。無  
風、快晴である。順応のため裏山  
を1500m位の高さまで50分かけて  
登る。シェルパ達はG1、C1、C3の  
各高所キャンプに揚げる荷物の  
整理をしてすすす。

ABCでの食事はすべてシェルパ

のコックがやってくれる。日本  
人に合うような食事を勉強して  
いてそのホスピタリティーには  
感激する。しかし矢張り人によ  
り好みもあり、体調によっても  
食が進まない時もある。振  
りかけ、梅干、味付け海苔など  
個人で用意しているとよい。

八月四日 無風、快晴。六時  
よりヒマラヤ登山恒例の神事が  
始まる。経文を書いた赤、青、  
黄、緑、白の小旗をテント村を  
越えて丘から丘に張り巡らせ、  
一段高い所に石積みの祭壇を作  
る。祭壇の中央に旗竿を立てて  
日章旗とその下にネパール国旗  
を結ぶ。米、ツアンパの粉、菓  
子等を供え線香に火をつける。  
サーダーがお経を唱え皆で登山  
の成功と安全を祈願する。最後  
に全員で米、ツアンパの粉を天  
に向かって投げる。これでいよ  
いよ登山のスタートとなる。シ  
エルパ達はいつせいに荷揚げに  
出発しB(C)は急に静かになる。

トレッキング以来毎朝パルス  
オキシメーターで動脈血酸素飽  
和度のSpO2を計り、この値を順  
応の目安にしてきた。私はA(C)に  
はいつてからもSpO2の値を  
変動している。食事以外に二  
の水を毎日飲んでいたので小便  
もよくでて頭痛もなく浮腫も全  
く見られない。この日のミート  
イニングで第二次アタック隊には  
いることになる。

八月五日 無風、晴。B(C)から  
C( )までの距離がシェルパの足で

六〜七時間、我々の足で九〜十  
時間と遠すぎるため、第一スロ  
ープの基部で氷河の横断点にデ  
ボキャンプ(B(C))を作り、此処か  
らC( )への荷揚げがはじまる。こ  
れらはすべてシェルパがやって  
くれる。シェルパ頭(サーダー)  
の名はラクバ・テンジン・シェル  
パ(B(C))で他の六人のシェルパ達  
もエベレスト、マナスル、チョ  
ーオユ、シヤパンマ等8000mの  
経験者を含む強力な若手メンバ  
ーで小西政繼、貫田宗男などを  
頂上に導いた経験者である。8000m  
まで無酸素でぐんぐん登って行  
く姿を見ると自分も登れるよう  
な気になる。彼らの協力に頼っ  
て登らせてもらうのである。我  
々はシュラフ等の個人装備だけ  
を持って登ればよいのである。

シェルパ達がルート作業を進  
めているこの日は、順応促進の  
ため近くのB(C)の丘に登る。雪  
のある二つのピークの間からポ  
ーロンリの東壁と北稜が見える。  
夕方アイゼンの調整とユマール  
リングとマツシヤリングのシユミ  
レーションをして装備に落ち度  
がないか確かめる。

八月六日 無風、曇。六時  
起床。どうも朝の天気が思わしく  
ない。八時ごろより桜の花びら  
のような雪が音もなく降って  
くる。5000m以上の視界は0となる。  
風は無く実に静かな一日である。  
この頃になると新鮮な野菜が欲  
しくなる。朝鮮漬、白菜漬、沢  
庵漬等が恋しい。一夜漬けの素

等持参して現地の野菜で漬物等  
つくるのもよい。コックが作っ  
て呉れるお粥が美味しく食べら  
れる副食を用意すればもつとよ  
かった。

C( )の設営を完了させたシェル  
パ達は雪のため行動できず、全  
員B(C)に帰り明日は一日休養する  
ことになる。

八月七日 晴。順応のためB(C)  
の裏山に登るため九時にテン  
トを出発する。一四時に山頂に  
つく。一時間に約500mの速度で  
頭痛もなくまずまずの成績であ  
る。  
隊員の一人がどうしても順応出  
来ず、明日B(C)を下りて帰国する  
ことになる。隊員とシェルパ全  
員で別れの晩餐会をする。ス  
ターラインで空しく帰って  
いく人、明日に賭けて密かに闘志  
を燃やしている人、励ます人、  
慰める人、無言の人、人生の縮  
図のようだ。外はしんと雪  
が降り続けている。

八月八日 ガス、雪。シェル  
パ全員が荷揚げのためB(C)をあと  
にする。M、Sの両名もC( )に入  
るためシェルパの後に続いて出  
発する。私は昨日裏山に登った  
ので一日休養することにしてテ  
ントで横になる。何も考えず何  
もせず頭の中を空っぽにして個  
人テントのなかで過ごす。外は  
一日中重い湿った雪が降り続け  
ている。

八月九日 今日から高所キャ  
ンプ入りを始める。クライミン

グギヤ、シュラフ、個人食料、  
ブラシューズをザックに入れC( )  
に向かう。昨日の雪でトレース  
が消えた起伏の激しい氷河左岸  
の碎石モレーン帯をベナントを  
頼りに行く。霧が降ったり晴れ  
たり曇りになったり不安定な天  
気である。一時間かかってC( )に  
着く。此処は第一スロープの取  
り付き点でヤボカンチャロ氷河  
の最奥である。氷河の氷塔の成  
長も小さく3m位である。個人  
装備をデポして周囲を整理しB(C)  
に下る。

八月一〇日 降雪のため各テ  
ント停滞となる。  
八月十一日 朝霧が晴れて青空  
がかえってきた。シヤパンマ  
の姿が青空の中に鮮やかに浮き  
上がって見える。しかし先日ま  
で岩肌を見せていた北壁も、特  
徴のあるピナクルも白く雪化粧  
をしている。  
体調はとてつもない。しかし油  
断があった。呼吸が浅くなつて  
いたためだと思ふ。昼頃心臓の  
鼓動が急に激しくなり、体が揺  
れ出した。慌ててテントに入り  
バンドを緩めて横になりダイヤ  
モックスを半錠のみ複式呼吸を  
三〇分続ける。やがて鼓動も収  
まり体も暖かくなった。『俺の  
シヤパンマもこれで終わり  
か。』と思ったり『ひよつとし  
て死ぬかな。』と思ったりした  
が、その後なにも起こらず無事  
に行動できた。複式呼吸の威力  
を痛切に感じた出来事だった。

ラジオ放送によると、この三日間の悪天で山脈の南のインド、ネパール、バングラデッシュでは大雨で道路の決壊、家屋の水没など大変な被害があったらしい。モンスーンの雨はすべてヒマラヤ山脈で遮られる。

八月一二日 雲が切れて青空がみえる。山には霧がかかっているがやがて晴れるだろう。今日ABCを出発したら登頂まで帰らない。D.Pへの道は今日で二回目です。少し近く感ずる。D.Pに着いてみると無人のテントの回りに食料の包みやガスボンベ等が散乱している。鳥のいたずらである。大きな鳥が羽こちらを眺めている。入口のフラスナーに石を乗せてなかったのだ。鳥が入り込んで荒らしたのだ。個人食の黄粉餅を夕食に食べて快適な眠りにつく。

八月一三日 日の出の時は快晴で山全体が黄金色に輝いている。七時頃になると曇空となる。八時四〇分にD.Pのテントを出発し四〇分かけて氷河を横断し第一スロープにかかる。

シシヤパンマのルートの概略は、まずこの第一スロープを登りプラトウーにある。ここがC(6200m)で、此処から傾斜三〇度ぐらゐの長い長い第二スロープを登り更にS.Mほどの長い廊下の中央がC(6800m)となる。次に北稜から張り出した小さな傾斜六〇度のリブを北稜に突き上げ

た所の鞍部がC(7300m)で、ここから

ら一気に頂上を往復するのである。

第一スロープの中程とプラトウーに登りつく二か所にヒドゥンクレバスがあり、固定ロープがセットしてある。プラトウーに近づくと見えてきた。地吹雪が烈しくなり前が見えない。ヒドゥンクレバスに片足落ちて慌てて手で支える。一四時〇〇に着き小休止してD.Pに下る。下りは乗

で一六時三〇分にはD.Pに着く。八月一四日 天気は晴で風もない。昨日のルートをまた登ってCに泊まる。

八月一五日 一日Cに滞在して二次隊で頂上を狙うことになる。シェルパ二名が体調を崩しCからD.Pに下った。

八月一六日 七時一五分 晴天のなかCを出発する。S.Mの高度でも風のない太陽の下では汗が滴り落ちる暑さだ。第二プラトウーの登りは実に苦しい。複式呼吸を三呼吸で一步の速さでペナントの数を一本また一本と辿りながら目の前の一步を登ることに全神経を集中させる。上も見えない下も見えない。足元の一步だけ見て、これをつけていけばいつか終わると自分に言い聞かせてただひたすら耐えた。

一四時、やつと廊下の縁にたどり着く。一休みして又長い廊下をCに向かつて行く。廊下と言っても傾斜は緩いが大きく起伏がありCの影は全く見えない。ここはいつもシシヤパンマ風が

吹いていてトレースは消えて歩きにくい。ペナントだけを頼りにひたすら二時間歩き続け一六時にC(6800m)に着く。

正面にシシヤパンマの北壁が、振り返ればポーロンリの南東壁がみえ、左にリスムのまるとい頂きがある。ここは前峰と本峰の谷間でCとの無線も通じない位置である。夕方より静かに雪が降りだす。

八月一七日 午前三時に目覚める。Cの昨夜はO.S.Mの酸素を吸って寝たので快眠できた。テントを出てみて驚いた。S.Mの降雪である。まだ降り続けている。今日はCの一次隊がアタクの日である。酸素マスクを外しバルブを締め一人てコンロをつけて暖をとる。Tはよく寝ている。四時頃雪が止んで少し風が出て来た。

モンスーンのこの時期山脈の北側のチベットは雪は降っても雨は降らないが、このところ観察していると天気周期が見られる。八、九、一〇日の三日間荒れて一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇日と晴天が続く。一六日から又雪が降り出した。どうも我々のアタックは次ぎの荒天の周期に捕まったような気がする。

六時の定時通信で、Cは降雪のためアタック中止となり一日停滞することである。私とIは予定通り二名のシェルパと共に四人でCを目指すことにする。長い廊下が終わり主稜線に突き

上げるリブの取り付き点につくと、そこは雪崩のデブリで盛り上がりしている。リブの右側の谷から発生した新雪雪崩である。リブの傾斜は六〇度位あり上部は岩稜となつていて、岩稜帯にセットした固定ロープも昨夜の雪で埋まっていて下からは探しようがない。シェルパがCにむかってコールする。二名のシェルパが上からロープを掘り出しながら下つて来て先導する。

リブの登りも苦しい。上部は雪が柔らかく殆ど胸まである。ベルグシュルンドに落ち込み頭まですっぽり雪を被る。ユマーで体を引き上げ脱出する。やつとテントの丸い屋根の先端が見える。一步あるく毎にそれがしだいに大きくなる。やがて全体が姿を現す。テントの前にSが立っている。遂に来た。7300mのCだ。ゆっくり息を整えて一步一步テントに近づきSの体に倒れこむ。

八月一八日 四時に目覚める。風雪でテントが潰れそうである。風雪はまだ続いていて、今日はアタックの日である。出発は五時と昨夜の無線でCと打ち合わせが出来ている。隣のテントにいるシェルパ達との了解事項でもある。

私は上半身をシュラフから出して起き上がり時刻を皆につげ、『外がどんな状態でも食事だけは済ませて、出発の準備だけはしておこう。』と言った。Tは起

き上がってなにかしかかったがS、Mは行動を起こすこともなく静かである。私の呼びかけは全く無視された。腹立たしく思ったが私もいつの間にかシュラフにはいつていた。

五時『用意は出来たか。』いきなりテントの外張をあけて一人のシェルパが英語で叫びながら飛び込んで来た。四人は弾かれたように跳び起きた。私は心のなかで三人に向かって『馬鹿野郎』と叫んでいた。

すべての準備が整ってCを後にしたのは一時間四〇分遅れの六時四〇分であった。

この間シェルパはCとの無線で『隊員は行きたくない。と言っています。』と報告していた。『九俣の功を一簣に欠く』とはまさにこのことである。この時の我々の態度がアタックにどう関わったか今はわからない。あのとき何故もつと強く何回も皆に行動を促さなかったのかと、慚愧の念に駆られるばかりである。

八月一九日 昨日とは打って変わって快晴である。周囲の山々をカメラに収め、下山の準備をする。ここからCやABCもそしてネパール側のランタン山の山々が手に届く位置に見える。下りは一気にD.Pまで下り、処で一泊してCに帰る。シェルパ達はこの日のうちにABCまで下ってしまった。

八月二日 ABCにも確実に秋

が迫っている。一カ月前より朝夕の冷え込みがひどくなって来た。テントの回りにいっぱい咲いていた可憐なブルーポピーの水色の花びらもすっかり枯れてとげとげの茶色の茎とくり坊主になってしまった。

八月二三日 午後より雷鳴が轟き雪がふりだす。チベット高原には低い暗雲が垂れ込める。

八月二四日 ヤクが到着する。

八月二五日 朝ABCを出発し一日で戻す。

八月二六日 早朝五時にランクルでBを出発する。一日でカトマンドまで帰ろうと言う算段である。ニエラムでの昼食もそこそこにしてザンムーに向かう。しかし発電所を過ぎた所でこの前の大雨のため山崩れが起こり約2kmにわたって道路がなくなっている。心配してサードーに尋ねると、答は「No Problem」の一言である。なるほど道路の無かった昔にかえっただけなのだ。来るとき増水した川を渡った要領である。ただ前回と異なるのは回復するのに三ヶ月かかると言う事だ。

崩壊した道路の前後には100m位にわたって屋台が並び渡しの入夫や通行人の飯屋を開いている。道路が回復するまで其処が彼らの生活の場である。

荷物の乗せかえに二時間ほどかかったが一路カトマンドに向けてひた走り二二時頃ホテルについた。

### シエルパに感謝

私は今回初めてのネパールである。しかも8000m峰である。高度順応のための事前トレーニングはポーターによる荷揚げで、まるでハイキングの気分である。BC, ABCのキャンプ場設置もすべてシエルパがやってくれた。我々メンパーは高度順応に全力を尽くし体力の維持に神経を使うだけでよい。シエルパ達のなかにはエベレストは勿論のことシヤパンマの登頂経験者もいる。高所キャンプもルート作業もさらに荷揚げまでもシエルパに依存し我々は個人装備のみである。それでも彼らのスピードにはついていけない。老令の私が8000mの山に挑戦し自己最高高度7800mまで到達出来たのは、ひとえにシエルパ達の献身的な協力があったからである。若いシエルパも登山経験から言えば我々よりもより高くより困難な経験をもっているにもかかわらず、少しも其れを自慢したり我々を馬鹿にすることもなく、常に控えめでそれでいてサードーの命令一下、8000m以上の隊荷を嫌な顔一つ見せず担いでいく。彼らのこの柔順性と献身性は一体どのようにして、培われたのだらう。サードーとシエルパ達に感謝の気持ちで一杯である。

### 良かった点

一、高所順応：富士山四回、連続

登頂一回、山頂泊、Bの入山前5000mトレッキング二山

二、新高度に宿泊した初夜はダイヤモンドックス一錠服用、複式呼吸有効

三、酸素：8000より酸素使用すべて共同食を用いず、黄な粉餅、粥を中心とする個人レーションを使用。Bでは毎食黄な粉餅一ヶ食べる。

餅、白粥、梅粥、ぜんざい、黄な粉、プルーン、干しバナナ、黒砂糖、飴数種類、味付け海苔、ふりかけ各種、胡麻塩、コーンスープ、カロリーメイト、乾燥海、草サラダ、コンデンスミルク、カロリメイト、ピーナツ飴、梅干、持参

四、歩行：ストック二本Cまで使用、乾燥雪の歩行に特に有効。

### 反省点

一、靴処理と靴下インナーの乾燥とアウターの取り扱いに注意を怠ったため足の指が低温のためしびれる。

乾燥した靴下の取り替えを必ずすること。

二、天気と周期があり、約八日の周期である。八月八、九、十の三日間が山脈の西側は雪の天候で見渡す限りのチベット高原は真っ白な雪である。

次は十六、十七、十八の三日間が悪く特に十九、二十、二

一の三日間は皮肉にも快晴であつた。そして二二、二三、二四日がまた雪たなつた。



### 五月月例山行のお知らせ

月日：五月一〇日(日)  
場所：扇山(1661m)  
(宮崎県椎葉村)  
出発：五月九日(土)  
午後八時サニー発

- ※ 車内又はテント等でビバークができる準備をしておいて下さい。
- ※ 食糧は三食分プラスαを持参して下さい。
- ※ 時間があれば近くの山か、帰る途中のもうひと山登ります。
- ◎ 雨天決行
- ◎ ご参加の方は五月五日までにご連絡下さい。

TEL 0975-32-0926

### 後記

○産毛のような新芽は、あつという間に黄緑色の若葉に変わってしまいました。しかし千以上の上のところまで登るとまだ芽吹いたばかりの樹々でいっぱいです。

○今年は春先に降った重い雪が樹々の枝を痛め、山肌を雪折れ枝が埋め、無惨な姿を見せています。

○第二号も山行報告が中心となりました。今後もいろいろの記事を載せていきたいと思えます。

(K・I)

### 日本山岳会東九州支部報 第2号

発行者 梅木秀徳  
編集者 飯田勝之  
発行所 〒870-0021  
大分市府内町1-3-16  
サニースポーツ内 西 孝子方  
TEL・FAX 0975-32-0926  
題字 佐藤正八